

目次	大谷大学三百年史を考える	1
	昭和61年度「指定研究」 研究計画紹介	3
	昭和61年度「一般研究」 研究目的紹介	4
	昭和60年度「指定研究」 研究経過報告	7
	昭和60年度「一般研究」 研究概要	11

# 研究所報

No. 15

1986. 6. 30.

## 大谷大学三百年史を考える

学長 北西 弘

真宗総合研究所が発足してから満五年になる。年々その内容が充実し、着々と成果があげられている。とくに大谷大学三百年史編纂に向けての基礎史料の蒐集は、たとえ部分的な分野であるにせよ、実績があがっている。新年度には、大学史を検討するために陣容をさらに充実、拡大すべきであろう。編纂のすべてはチームにゆだねられることになろうが、大学史編纂にあたって留意したいことについて、若干の私見を披瀝しておきたい。

大学史は、大学の伝統を誇るために編纂されることが多い。大学に関わる人々の自覚を喚起するためには必要なことでもあろう。しかし、大学は誇るべき部分だけではなく、苦い経験と退嬰的な側面を多分にもっている。多くの大学史は、この苦い経験を貴重な体験として、それを伝統という名で無条件に美化している。体験が伝統となるためには、矛盾に対する正しい認識と、矛盾克服への努力がなければならない。時間的経過による矛盾の忘却、苦悩による事態の隠蔽、状況に対する感傷的な理解に終始する内容ならば、いかに膨大な大学史であっても、それは決して創造的な機能を発揮しないであろう。

ところで、ながい歴史を有しながら大谷大学には『大学史』がなかった。その理由は様々考えられるが、大谷大学では歴史をつねに現実の私の問

題として受けとめ、それを過去の問題として客観視したり、それを覚めた目でつめたく評論するような人がいなかったことによると思う。端的に言うと、大谷大学は昔も今も問いは一つで、時間と変化に対する関心を重視しなかったからであろう。大谷大学はたしかに、三百年というながい歴史をもつが、その歴史はつねに「今」にこめられて問いただされてきたのである。そのことは、伝統を外に置いてながめ、それを物象化する傾向の強い一般大学史に対する反骨であったといえよう。三百年史編纂にあたって、この事実と意味をまずふまえなければならない。それをふまえるならば、大谷大学三百年史はおそらく生きた『大学史』の一つのパターンを創造することになろう。

大谷大学がもった苦い経験は種々あるが、その内、宗門との関わりにおいて起った事件を忘れてはならない。大谷大学は創立以来、宗門の理解と援助によって維持されてきたことは事実であり、今後も宗門の願いにこたえる使命をもっている。しかし、大学と宗門の関係が親鸞の教えによって結ばれるかぎり問題はないが、政治的対応に腐心するようになると、宗門の願いも、大学の理念もその本質を失い、醜い事態に陥らざるを得なかった。ここにその事例をあげる余裕はないが、特に注意しておきたいことは、その苦い経験によって

大学自身が、せまい意味での宗門大学のイメージをつくりあげ、それが大学の特色であるかのように強調してきたことである。つまり、宗門大学とうたうかぎり、宗門からの批判を避け、身を安泰に保ちうるという安易さがなかったとはいえない。これが宗門と大学の間の不信感をそだて、それによって争議をおこしたこともある。人はだれでも先取りした行動をなすものであるが、上のような大学の状況を誘発した大学の心的根拠を十分分析し、嚴重に自己批判しなければならない。

大谷大学が背負ってきたこの事実を直視し、大学の悪しき予断を如何に思想的に克服するか、『大学史』を通して問いかえすべきであろう。大学が宗門に真宗を開闢した時代、宗門が大学を通して、ひろく仏教を世に公開した時代、その相は様々であるが、何よりも大事なことは大学の真の主体性であり、そこに学ぶ者の自己の確立である。大谷大学における学問はそのためにあった。予断と偏見に立脚した学問は、いかにみごとな理論構築がみられても、空虚な台詞にすぎない。宗門と大学、それが共通の願いとするところは、頭初から個の確立、人間成就以外になかったはずである。にもかかわらず大学が、その理念の実践に紆余曲折の道を歩まなければならなかった原因は何か。それを考えるとき個と全、大学と個人の関わりの混迷が問題となり、それは大学史の中で重要な課題の一つになろう。

集団と個人との関わりの問題は、実は大学に限らず、今日ひろく社会全体の課題である。即ち現代は、集団に埋没してきた個人の、主体的な独立を基本的な課題としている。そのことを除外して現代は、本質的に実現されたとはいえない。その意味では、個の自覚を建学の精神とする大谷大学は、早くから現代の在り方を指向し、先駆的な内容をもった大学であったといえよう。それはもちろん親鸞の精神に由来するもので、決して近代化の中で新しく考案されたものではない。しかしその大学も、組織の維持と発展を意識するようになると、大学という組織そのものの安泰を優先するようになり、個人はその陰にかくれることになった。個人は集団のためにのみ生き、集団に対する犠牲を美德とし、集団に殉ずることを最高の徳と考えるようになった。その意識は今日なお払拭されず温存されている。もちろん集団は個人の自覚

を保証し、その母胎としての機能をもつが、それは主体的な個人によって支えられた集団によって為しうることである。集団効果や集団規制、さらに個人の帰属意識が強くみられる今日、そのような集団はほとんど存在しないといってよかろう。個の学びを第一義とすべき大谷大学にあって、大学という集団はどのように理解され、維持されてきたのであろうか。大学史の中で、当然問われるべきことがらであろう。この集団と個人の関わりを問うということは、我々が真に自由であることの根元を問うことでもあり、きわめて重要な課題である。それはかつて蓮如が、教団の数量的な発展の中で「往生は一人一人のしのぎ」と諭されたことの意味を考えることともなる。学問の自由とは、人間成就を指向する学問という意味で自由なのであって、それは本来、大学という集団によって保証されることを望むべきものではない。また、そのような甘えを許さないものである。自由はまさに、自由によって保証されるので、そのことが逆に大学の自由を保証することになる。自由を他によって保証されようとするかぎり、不自由がつきまとうことになる。このような視点にたつて、大谷大学の建学の精神が、そのあゆみの中で空転することがなかったかどうか、問いただいたいものである。

大学史はまさに、そこに学んだ人間の思想的営為を問いつめ、現在の学びの根元を明白にする使命をもっている。大谷大学三百年史を考えることは、そのまま大谷大学の現在を限りなくゆたかにする内容をもっている。

#### 研究所人事

交替	
所長	(昭和61年2月9日付)
(教授・国文学)	渡 辺 貞 磨 (旧 古田和弘)
主事	(昭和61年4月1日付)
(助教授・英語)	市 橋 弘 道 (旧 片野道雄)
新採用	
嘱託事務員	(昭和61年4月1日付)
	開 発 比 差 子

## 大谷大学真宗総合研究所

## 昭和61年度「指定研究」研究計画紹介

昭和61年度の「指定研究」研究事業計画は、去る3月の研究所委員会で審議され、決定された。研究名および研究課題は継続されるが、研究組織については、四つの研究班とも代表が、北西弘学長に、また「真宗学事研究」のチーフが、幡谷明教授となるなど、若干の異動があった。

「真宗学事研究」では、真宗学事についてのこれまでの作業——基礎資料の収集、翻刻、カード化、および、講師年譜、年表の作成、史料解題、など——を精力的に進めると共に、これまでの研究成果を踏まえつつ、研究課題に取り組むことになった。特に、近代の資料の探索・収集・整理に重点が置かれることになる。

「海外仏教研究」では、これまでの研究成果を活用しつつ、1960年以降のビブリオグラフィの作成にむけて具体的な作業に入る。また日本の文献資料の公開に関して外国人研究者と共同して検討していくことも引き続いて行なわれる。文献資料の収集と検討については、フランス語圏に加えてドイツ語圏のものも充実していくこととなった。また東南アジアにおける仏教研究をも視野に入れることとなった。このような作業・研究を踏まえて、研究目的である海外における仏教研究の方法論の究明に向っていく。

委託研究の二件については、昨年度に続いてその研究作業が推進されることになった。

研 究 名	研究課題及び研究組織
真宗学事研究 (特定研究 北西弘) (代表 学長)	研究課題 「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」 研究員 幡谷明 (チーフ・教授・真宗学) 鈴木幹雄 (教授・倫理学) 大竹鑑 (教授・教育学) 大桑齐 (教授・日本仏教史学) 木場 明志 (専任講師・国史学) 草野顕之 (専任講師・日本仏教史 学) 渡辺貞磨 (所長・教授・国文学) 市橋弘道 (主事・助教 授・英語) 嘱託研究員 福島和人 (大谷高校教諭) 西田真因 (大谷専修学院指導) 研究補助員 三本昌之 (修士課程修了生・日本仏教史学) 深田虎雄 (日 本仏教史学) 片山伸 (日本仏教史学) 熊木剛 (真宗学) (以 上博士課程修了生) 宮崎健司、綿谷勝信、瀧弘信 (以上博士 課程)
海外仏教研究 (特定研究 北西弘) (代表 学長)	研究課題 「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資 料の収集」 研究員 長崎法潤 (チーフ・教授・インド学) 岩田慶治 (教授・社会 学) 多田稔 (教授・英文学) 箕浦恵了 (教授・西洋哲学) 安 富信哉 (専任講師・真宗学) 宮下晴輝 (専任講師・仏教学) 渡辺貞磨 (所長・教授・国文学) 市橋弘道 (主事・助教授・ 英語) 嘱託研究員 今枝由郎 (フランス国立中央科学研究所研究員) 大河内了 義 (神戸大学教授) リノ・ペリーニ (本学非常勤講師) ジャ ン-ノエル・ロペール (フランス国立中央科学研究所主任研 究員・高等学院講師) 彦坂周 (アジア文化研究所長・インド、 マドラス) ロバート・ローズ (本学非常勤講師・仏教学) 研究補助員 ウダガマ・スマンガラ (博士課程修了生・仏教学) 橋本篤 司 (博士課程)
西藏文献研究 (委託研究 北西弘) (代表 学長)	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版西藏大蔵経及び蔵外文献の文献研究」 研究員 小川一乗 (チーフ・教授・仏教学) 片野道雄 (助教授・仏教 学) 小谷信千代、白館戒雲 (以上専任講師・仏教学) 研究補助員 松田和信 (本学非常勤講師・仏教学)
大蔵経学術用語研究 (委託研究 北西弘) (代表 学長)	研究課題 「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」 研究員 神戸和磨 (チーフ・教授・真宗学) 古田和弘 (教授・仏教学) 木村宣彰 (専任講師・仏教学) 一色順心 (専任講師・仏教学) 安藤文雄、三明智彰 (以上専任講師・真宗学) 研究補助員 井上円、加来雄之 (以上本学非常勤講師・真宗学) 兵藤一 夫 (本学非常勤講師・仏教学) 萩原晃俊 (博士課程)

〈一般研究〉

## 昭和61年度「一般研究」研究目的紹介

大谷大学真宗総合研究所

### 昭和61年度「一般研究」選考結果

昭和61年度の「一般研究」は次のように決定した。共同研究が2件、個人研究が2件である。そのうち継続は共同研究の1件で、研究課題の重要性と併せて、研究の進捗状況が加味されて採用された。また、新たな4件の研究も綿密な研究計画にもとづいて所期の目的が達成されようとしており、それぞれ特色ある着実な研究が期待されている。

(A)共同研究

研究代表者	研究テーマ及び研究組織	補助額
多田 稔 教授	「『オックスフォード運動』の意義とその影響について」(継続) 研究員 多田稔(教授・英文学) 内藤史朗(教授・英文学) 鈴木繁一(助教授・英文学) 佐々木正昭(助教授・教育学) 村瀬順子(専任講師・英文学)	100万円
木場明志 専任講師	「東本願寺中国布教史の基礎的研究」 研究員 木場明志(専任講師・国史学) 大桑斉(教授・日本仏教史学) 安藤智信(助教授・東洋仏教史学) 嘱託研究員 桂華淳祥(助手・東洋史学)	100万円

(B)個人研究

研究者	研究テーマ	補助額
小谷信千代 専任講師	「チベット語古典文学の研究」	50万円
池上哲司 助教授	「『私』の現象学的究明」	50万円
大内文雄 専任講師	「中国中世における政治と宗教」	50万円

今年度は前述のように、共同研究2件、個人研究3件が推進されている。以下に、それぞれの研究の研究課題およびその研究「目的」を紹介する。

〈共同研究〉

### 「オックスフォード運動」の意義とその影響について

研究代表者 多田 稔  
本学教授 (英文学)

研究目的：前年度の研究課題を一層深めていくことである。すなわち、その第一点は、ニューマン、キープルによって始められた19世紀英国に起ったこの運動の根本理

念と、その過程を仔細に調査し、この運動の意義をより一層明確にすることである。最近極めて盛んになってきた19世紀英国研究の重要なポイントともなる研究である。第二点は次の点である。そもそも、この運動は当初は体制内改革といわれるべき性質を帯びた改革であったのであるが、運動が進むにつれて、そのライト・モチーフである英国国教会の教義に対する疑いが生じ、前記の推進者たちが、離脱したり、あるいはローマン・カトリックに転向したことにより、この運動は挫折してしまっただけである。このことが各界に与えた影響は大きかった。この時点におけるまでに、英国はさまざまな要因により

国力の充実を果たし、ヴィクトリア期の盛時に入る直前に来ていたのだから。この運動の挫折は、その後の聖と俗との両極化の傾向にはずみをつけたといえるだろう。運動の中心人物が、英国国教会が且って袂をわかったローマン・カトリックの伝統に回帰したことにより、残された英国教会はその後の俗化の傾向に対して打つ手を持たなくなってしまったともいえよう。自然科学の発達と社会に及ぼしたその大きな影響、宗教から完全に離脱した唯物的世界観や自然主義文学、あるいは審美主義的傾向へ赴いた世紀末の風俗と退廃といった現象がその後

に続いたわけである。このことは、この運動の始まった1830年代に至るまでに、徐々に貯積されてきていた近代化に関する諸傾向が、この運動によって、一時、いわば堰き止められたがために、かえって力を貯え、一層のはずみがついて両極化したのであると言えるのである。こうした広範囲にわたるその後の流れを全て網羅するには、多くの資料や日時や強力な研究体制が必要であろう。しかし、われわれは限られた日時と枠内でこの運動の影響を辿り、せめて、その輪郭だけでも明らかにすることを研究目的の第二点としているものである。

### ＜共同研究＞

## 東本願寺中国布教史の基礎的研究

研究代表者 木場 明志  
 本学専任講師 (国史学)

東本願寺の中国布教史について、近代日本仏教史の問題としての日本史的視点、および周辺国家(民族)関係史、対列強外交史の東洋史的視点、の2つの視点から史料の蒐集を中心として基本的問題分析を行ない、もって当該研究課題の基礎的研究に資することを目的とする。

従来の中国布教史としては、「宗門開教年表」「東本願寺上海別院60年史」の成果があるが、狭義の真宗史、東本願寺史の域を出るものでなく、上記視点を有するものではない。史料蒐集を通じて、具体的布教経緯の中から、東本願寺中国布教への思想的歴史的背景をうきぼりとし、一方、中国側の受けとめ方とその歴史的背景を探り、統合的に布教史を捉えようとする特色を有する。

殊に中国側の事情と日本からの布教への対応・対処を視野に入れることに従来にない独創性をもち、日本側事情についての日本近代史的視野の導入とあいまって、新しい成果が期待できる。

課題の把握のために、明治以降全般に亘って史料蒐集を進めていくが、年度内の到達可能範囲としては、明治期における前半期の支那布教係小栗柄香頂を中心とした動きと、後半期の日清戦争を契機としての動きとの、明治時代の2期について一定の成果を示し得よう。即ち、明治前半期においては、中国布教は排耶護法の意識に立って、同じく仏教国である中国との共同防邪戦線をめざしたものと捉えた場合、中国はいかなる次元でそれに対応しているか、また後半期においては侵略的様相を増す中で、列強がキリスト教の中国布教権を得ていったに對し、日本は何故、仏教においてそれをなし得なかったのか。大乘仏教の怨親平等の精神が、日清戦後どの時期まで、帝国主義気運の中で保たれているか、日本側の中国の地における仏教会設立と、中国側のそれへの呼応、あるいは対抗の行動はどのようであったか、などについて明らかにし得るであろう。

### ＜個人研究＞

## チベット語古典文法学の研究

研究員 小谷信千代  
 本学専任講師 (仏教学)

チベット語の古典文法に関しては、Csoma de Körösが1834年にカルカッタから *A Grammar of the Tibetan Language in English* を出版して以来、かなりの数にのぼる文法書が出版されている。優れた文法書としては、J. Bacot : *Grammaire du tibétain littéraire*, Paris,

1946-48, 2 vols が挙げられる。大谷大学でも稲葉正就博士が『チベット語古典文法学』を出版されている(昭和29年)。近年では、M. Hahn が勝れた文法書 *Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache*, Hamburg, 1972, を出版した。

それでもなお、チベット語の性格は完全に明らかになったわけではない。

幸い近年チベット人自身が文法書を著わし出版している。それらの中には従来みられなかったような研究書風の文法書が含まれている。dMu dge bSam gtan : *Bod kyi yi ge'i spyi rnam blo gsal 'jug ngogs*, 成都 1979 とか、sKal bzang 'gyur me : *Bod kyi brda sprod rig pa'i khrid rgyun rab gsal me long*, 成都 1981 というチベッ

ト人自身によるチベット語の古典文法書は、それまでのヨーロッパからみたチベット語文法とは異なる視点をわれわれに与えてくれるはずである。本研究は sKal

bzang 'gyur me (ケーサン・ギェルメー) の『藏文文法教程』を中心として、チベット語古典文法に取り組んでみようとするものである。

### ＜個人研究＞

## 「私」の現象学的究明

研究員 池上 哲司  
本学助教授 (倫理学)

本研究の目的は、様々な他者との関係の内、あるいは様々な状況の内、ときには自我として、自己として、あるいは人格として解されるような、いわゆる「私」なるものの在り方を現象学的に明らかにすることにある。ここでいう現象学的にとは、「私」なるものを、現象するそのありのままの姿において把えるということである。したがって、我々の究明せんとする「私」なるものは、私という人称代名詞が指示するところのものであると単純に考えられてはならない。さらにまた、これまでの哲学史、倫理学史においてなされてきたように、主体とか主観、あるいは自我、自己、人格といったものによって「私」なるものを説明せんとすることも厳しく拒否さ

れなければならない。なぜならば、主体とか自己とか、人格といった言葉がその明確な内実を欠き、空虚なものとなっていることは否定しがたく、それらの言葉を安易に用いること自体、知の誠実さの欠如、思考の怠慢を示すものにほかならないからである。「私」とは何であるかという問がまず答えられねばならない。つまり、「私」なるものの具体的な在り方が明らかになる過程ではじめて、自己とか人格とか呼ばれてきたものの内実も又明確になってくるのである。

研究申請者(池上)はこれまで、カント哲学、キリスト教神学、及びロック、ヒュームの研究を通して、自己(Self)、人格(Person)の問題を追究してきた。今後は現代の英米哲学における Self-identity, Person をめぐる議論、さらに精神医学(たとえば Blankenburg) や社会学(たとえば Schütz, Goffman) の議論の研究を通じてこの問題を考えて行く予定であるが、61年度は現代の英米哲学における Self-identity の議論を手掛りに、具体的な「私」なるものと自己(Self)との関係を明らかにする。

### ＜個人研究＞

## 中国中世における政治と宗教

研究員 大内 文雄  
本学専任講師 (東洋史学)

中国の三国から唐宋五代の時代に至る所謂中世において、仏教は、仏典の紹介翻訳が陸続となされると共に、次第に中国の風土に根つき、道教もそれにつれて教義を組織し仏教と共にその時代の人々の精神生活に甚大な影響を与える大勢力へと発展していった。しかし、これら二大宗教勢力は、高尚な宗教教理を準備すると同時に、その時々々の為政者・支配階層に結びつくことによって、侮り難い政治勢力をも形成していった。

所で、これらの宗教勢力は、当然のことながら、当時

の支配体制と分離しては存在し得ない。本研究が対象とする南北朝末期から隋・唐初にかけての時代は、仏教が印度的色彩を変容させて、中国化へと向う極めて注目すべき時代であるが、それはまた門閥主義を標榜する貴族が、社会の支配勢力として牢固とした権威を誇る時代でもあった。仏教は、更にまた道教は、こうした貴族勢力に接近することによって、みずからの勢力を培っていったと言ってよい。

本研究の目的は、そうした貴族勢力に支えられ、社会的勢力として無視し得ぬまでに発展した宗教の姿を、特に仏教を中心として探究する所にある。この目的を達成するためには、僧尼の出身母体の調査と並行して、それ等僧尼と門閥勢力との交渉の調査が不可欠である。また、更に今一つ推進すべきものとして、当時の仏教者の歴史意識の問題がある。それは、政治に対する仏教者の意識の問題ともなり、時の支配階層に結びついた仏教を考究する本研究の目的に沿う課題である。

昭和60年度

## 「指定研究」研究経過報告

## 真宗学事研究

## 「大谷大学300年史編纂・それに関する文献資料の研究」

研究員 鈴木 幹雄  
(60年度チーフ)

「真宗学事研究」は昭和60年度に「大谷大学300年史編纂」を目指し、「それに関する文献資料の研究」を課題とすることになった。それとともなって本研究は従来の資料研究を継続しながら、それを再度点検し、大学史編纂の準備のために整備することを主眼とした。資料研究の意図は一方で、大学史編纂に必要な資料を調査・収集し、翻刻ないし複写して利用しやすくすることにあるが、他方で、基礎資料の読解を通して従来の学事研究を批判的に継承しながら、新しい大学史観を模索することにあった。この二重の意図に従って資料検討会も月一回開き、学事研究上の技術的問題を処理すると同時に、学事研究上の新しい問題を掘り起こしてきた。研究員は研究補助員の作業を指導しながら各自のテーマを設定したが、年度半ばで『真宗』連載の「大谷大学—320年史が語るもの—」の執筆に参加することになり、そこで与えられた課題を追究し、2月の研究会で発表した。嘱託研究員はそれぞれのテーマについて3月の研究会で発表し、学事史の根本的な問題を指摘することになった。なお7月に懇談会で研究代表者（前学長廣瀬教授）から大谷大学史編纂の思想的課題についての見解が語られ、資料研究に大きな刺激と一つの方向が与えられた。（談話の一部分は『大谷大学300年史』に向かって」と題して『研究所報』No.13に掲載されている）

〈資料整備〉 前年度からの作業の経過は次の通り。

1. 『上首寮日記』、『講師寮日記』の翻刻終わる。（但し、本文の厳密な校訂は将来の刊行の際になされることになる）。
2. 『中外日報』から大谷派の学事に関わる記事を探録する作業は大正3年～昭和3年の期間を終わる。各事項はカード化して年表の作成に備える。

3. 学寮・大学の諸条規の編纂。
4. 『嚴如上人御事蹟記』の校訂。
5. 学寮創設期の資料探訪のために太宰府市、唐津市に出張（木場・草野研究員、三本研究補助員）。
6. 図書館所蔵の旧宗学院文書の点検。
7. 資料目録の作成。これまで収集された資料はカードに記され、いくつか目録も作られてきたが、それらを一つにまとめて目録を作る必要があった。そこで、『大谷派学事史』・『真宗教学史』・『真宗学史稿』を仮に基本文献とみなし、そこに記されている資料を核として、それにこれまで見いだされた資料を付け加えて「資料名目録」を作成した。これに依って今後未確認の資料を探し、また資料解題を作成していくことになるだろう。

〈資料検討会〉 学事研究にとって基礎資料の読解は不可欠の作業である。資料検討会では資料の現状が報告されるだけでなく、その資料の価値やそこから触発される問題が指摘され議論された。特に、6月15日「高倉学寮敷地図について」（三本・深田）、9月26日「護法場創設記—上首寮日記より—」で、それぞれ研究補助員から報告があり、論議を通して、最も基本的な事実、例えば学寮の位置、学寮の日常生活、学習の実際などが不明のまゝであることが注意された。このような事実を明らかにすることによって、学寮・大学をその時代の社会的状況のなかで具体的に捉らえることができるようになるのではないかと。また、この着想から新しい方向に資料調査がなされることになるだろう。

〈研究会〉 研究員は当初、それぞれの課題を設定したが、年度半ばで『真宗』の連載「大谷大学—320年史が語るもの—」が企画されるとそれに参加することになり、それぞれ大谷大学史の一時期を担当することになった。その際各研究員は研究代表者の示した方向に沿って、学寮・大学を教団・国家・時代のなかでトータルに捉らえてみようとして試みた。それらは2月20日の研究会で次の題で報告され、大桑研究員が総括的報告を行った。

「教権の下で—高倉学寮・宗学の成立—」

（草野研究員）

「近代との解近—護法場・大学への萌芽—」

（木場研究員）

「仏教の解放に向かって一大谷大学の新生一」

(鈴木研究員)

さらに3月12日の研究会では囑託研究員二氏の報告が次の題でなされた。

「『親鸞の仏教史観』(曾我量深)をめぐって」

(福島和人氏)

「異安心史について」(西田真因氏)

福島氏はそこで「仏教史観」とは何かを検討しながら真宗史への視点を問い、また西田氏は、異安心の分類と規準を整理し、いわゆる異安心史の問題が信仰の言語表現とその解釈という問題を現代に投げかけていることを示した。両氏の報告は、真宗の教学の史的研究がはらむ信心(仰)と歴史研究との内的緊張関係をあらわにし、本研究の思想的課題の深刻さを印象づけた。

## 海外仏教研究

「海外における仏教研究に関する  
方法論の研究および文献資料の収集」

囑託研究員 ロバート・F・ローズ

欧米諸国における仏教研究は、ますます活発になり、注目されつつある。専門の研究者の数も年々増加し、研究分野・方法論も多彩である。それらの動向を的確にとらえるため、「海外仏教研究」は発足以来、資料収集・調査研究を行ってきた。その成果の一部は、『研究所紀要』(創刊号)、『研究所報』などに発表されている。

従来の研究成果を基礎にして、昭和六十年代においては、海外における仏教研究に関する方法論の研究を、主なる目的としてきた。さらに、文献資料の収集と検討もひきつづき行なわれたが、特にフランスにおける仏教研究を対象とした。定例の研究会もこれらのテーマにそって行なわれた。また、本研究では欧米における仏教研究のビブリオグラフィの作成をひとつの目的としているが、収集された文献にもとづいて、具体的にビブリオグラフィの作成にとりかかっている。

### <研究例会>

定例の研修会では、研究テーマに即して、大学内外の研究者を招き、欧米の仏教学研究の方法論や、フランス仏教研究の現状などについて研究発表をしていただいた。

一、四月二十五日

T. Vetter 博士をかこむ学術懇談会

Dr. T. Vetter (ライデン大学教授)

二、五月二十八日

“Etienne Lamotte の学問”

Dr. H. Durt (法宝義林研主任研究所員)

三、六月二十日

「北米における仏教学の置かれている現状」

Dr. Shotaro Iida (University of British Columbia 準教授)

四、七月四日

“Recent Approaches to Hermeneutics and History in the Study of Buddhism.”

Dr. John Maraldo (University of North Florida 準教授)

五、十月三日

「ウイスコンシン大学でのジョイントセミナー(浄土教)に参加して」

安富信哉研究員

宮下晴輝囑託研究員

六、十月八日

「アメリカ仏教の一面 —アメリカを旅行して—」

多田稔研究員

七、十月十七日

「中国的仏教研究」

楊曾文 (中国社会科学院世界宗教研究所仏教研究室主任)

八、十月二十二日

“Thoughts on the Epithet ‘Arhajno’ Used in the Opening Stanza of the ‘Mahayanasutralamkara’”

Dr. Robert Thurman (Amherst College 教授)

九、十二月十七日

“On Understanding Religious Men and Women”

Dr. John Ross Carter (Colgate University 教授)

十、三月四日

“Shinjin: More Than ‘Faith’?”

Dr. John Ross Carter (Colgate University 教授)

なお、Dr. John Maraldo の研究発表は“A Review of Some Approaches to Hermeneutics and Historicity in the Study of Buddhism”と題して、『研究所紀要』(三号)に掲載された。また安富信哉研究員の発表は「アメリカにおける真宗学の動向—ウイスコンシン大学「浄土教ジョイント・セミナー」に参加して—」と題して、多田稔研究員の発表は「アメリカ仏教の一面 —アメリカを旅行してし」と題して、また楊曾文氏の発表は「中国的仏教研究」と題して、それぞれ『研究所報』(十四号)に掲載された。

また三月十八日から四月二十二日のあいだ、毎週二回、コルゲート大学教授 Dr. John Ross Carter による仏教特別セミナーを開催した。この一般公開のセミナーは、Carter 博士が京都に留学中のコルゲート大学の学生のために行った日本仏教についての一連の講義であったが、大学内外からも多くの聴講者を集めた。今後もこのような欧米の講師によるセミナーが行われることを期待する。

〈ビブリオグラフィ作成と資料収集について〉

欧米の諸言語で発表された仏教研究の論文・著作のビブリオグラフィ作成は、「海外仏教研究」発足当時から目的であるが、今年度も新たに発表された論文・著作をリスト・アップする作業を行ない、また従来作成されたビブリオグラフィを補足することに努力がそそがれた。また欧米で出版された仏教研究書を収集し、300冊ちかく購入した。六十年度は特に仏教学関係の雑誌のバック・ナンバーを積極的に収集し、ビブリオグラフィ作成の資料とすることができた。

## 西藏文献研究

### 「大谷大学所蔵の北京版西藏大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

研究員・チーフ 小川 一乗

西藏文献研究班も発足以来2年が経過した。当研究所報13号で報告したように、本研究班は次の2部門よりなる研究を継続中である。

1. 北京版西藏大蔵経丹殊爾部の勘同目録の編纂
2. 蔵外資料の研究

1. 勘同目録は、大谷大学図書館所蔵の北京版西藏大蔵経に取められた全典籍をデルゲ版・ナルタン版と対校し、それぞれの題名・章題・著者名・訳者名・校訂者名などの異同を示すとともに、各典籍の奥書を翻訳して研究者の便宜を計ったものである。甘殊爾部（經典部）の目録はすでに戦前に出版されていたが、戦後北京版大蔵経が影印出版されたことを機会に丹殊爾部（論典部）の目録の編纂が開始され、昭和40年に第一分冊を出版して以来、第六分冊までが本学図書館より出版されている。さらに編纂作業は59年度に本研究班に移され、第七分冊（般若部と中観部）が60年5月に出版された。第七分冊の出版以降、編纂作業は第八分冊の出版に向けて進行中であり、61年度中にはその作業を終える予定である。現在編纂中の各部門は研究者のニーズも多く作業は慎重に進められている。第八分冊には経釈部・唯識部・阿毘達磨部が収録されるが、第8分冊を含めて二ないし三分冊で編纂作業は終了すると思われる。

2. 本学図書館には翻訳文献としての上記北京版大蔵経とは別に、チベット人自身の手になる蔵外文献が四千点以上も保存されている。蔵外文献に対する目録は昭和48年に出版されたが、この目録は索引を含まず利用に際して不便な状況が続いていた。本学図書館では以前より数名の研究員がチベット人協力者の白館戒雲氏（本学専任講師）とともに全文の内容を整理したカードを作成し

ていたが、その作業も昭和58年度をもってそのカードに基づく各種索引類の原稿の完成という形で一応の成果をあげることができた。そしてこの索引の出版も我々研究班の仕事に加えられた。研究班が発足した最初の一年間は、その原稿をチベット文タイプライターを用いて清書し、オフセット印刷に附すための版下作りに費やされたが、60年度はそれに最終的な校正を加え、英文と和文による凡例および広瀬果学長の序文を附し『西藏文献目録索引』として11月に当研究所より出版された。この索引は、(1)正式書名、(2)略書名、(3)著者名、(4)内容項目別の各索引および同一文献一覧表、目録訂正表からなり、255頁に及ぶ大部なものとなった。これによって本学の蔵外文献はより近づきやすいものとなったが、我々は、この索引が研究者に広く利用され、世界のチベット研究に資することを願って止まない。

さらに研究班はこれらの作業と平行して、蔵外文献中に見出される稀覯本を影印出版するための準備を進めてきた。今では各地の多くの蔵外コレクションが知られているが、本学のコレクションは木版による刊本のみには止まらず中国東北部で蒐集された多くの写本類を含み、他の専らチベット本土で蒐集されたコレクションに比べ際立った特徴をみせている。その中にはモンゴル人の手になる『大唐西域記』のチベット語訳写本、ダルマキールティの『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に対するサンブ学問寺系の学僧による註釈の写本（これは世界に現存する唯一のもので、チベット人の書いた註釈の中で最も古いものの一つ）など貴重なものが数多く見られる。そして60年度に我々は今後出版すべき十数点の文献の選定作業を終え、その第一巻としてチベット語訳『大唐西域記』が選ばれた。61年度には出版に向けて編集作業に取り掛かる予定である。

なお、上記『勘同目録』第七分冊および『西藏文献目録索引』は当研究所において実費（勘同目録¥4,500・目録索引¥4,000）にて配布中につき、入手希望の方は研究所受付けまで申し出られたい。

以上、60年度の研究の進行状況を中心に今後の展望をも含めて報告した。

## 大蔵経学術用語研究

### 「浄土教関係典籍における 学術用語の総合的研究」

研究員 三明 智彰

本研究は、『大正新脩大蔵経』第八十三卷・八十四卷所収の日本撰述浄土教関係典籍(日蓮宗関係典籍を含む)について、正確かつ厳密な解説を通して特に重要な学術用語を選定し、その分類研究を行うものであり、その研究成果は『大正新脩大蔵経索引』第四十三卷統諸宗部六として昭和六十二年三月に公にされる予定である。この索引は、音次索引(五十音)・分類項目別索引・検字索引(字画・四角號碼)から成り、本研究の成果を踏まえて収録典籍の解題と凡例とを巻頭に配するものであるが、現在すべての原稿を揃え点検作業を行いつつある所である。ここに選定された用語は、教理・戒律・人名・天文・地理・動物・植物・鉱物・心理・言語・紀年・芸能・美術等の三十項目に分類されて音次索引に配列される。各用語一つ一つには、それが属する分類項目が示されているので、仏教研究者は勿論のこと専攻を異にする研究者や初学者にも便宜と利益を与えるに違いない。

本研究で対象とした典籍は浄土宗、真宗、融通念仏宗、時宗、南都・叡山浄土教等、日本浄土教の代表的な典籍八十五点と日蓮宗関係の典籍十三点である。これらの中には、和文体のものが非常に多い。このことは、特に鎌倉・室町期の日本仏教、就中浄土教の民衆との深い関わりを物語るものと見ることができよう。

以下、浄土教典籍を大きく三分して、本研究の内容を簡単に述べることにしたい。

第一に、源空と浄土宗各派の典籍については、まず源空の名著『選択本願念仏集』の学術用語を精査するとともに、弁阿や良忠等の註釈者達が源空の浄土教をどのように継承しているかを明らかにすることに努めた。次に『黒谷上人語灯録』等の研究により源空の教学と教化の全容を窺い、さらに弁阿・聖閻・向阿の著作を通して源空滅後の浄土宗鎮西義の確立の様相を明らかにした。特に向阿の『帰命本願抄』は念仏往生の要義を巧みな和文を以て説いたもので、彼の『西要抄』『父子相迎』を加えて、「三部仮名抄」と称される仮名聖教である。次に西山派の祖証空の『選択密要決』をはじめとして、証空没後の顕意・覺融・恵仁・明秀・妙瑞にいたる西山義の内容を検討した。

第二に、親鸞の著作と真宗の諸典籍については、まず、親鸞が撰述した典籍十三点と書簡集二篇について、『顕浄土真実教行証文類』を中心に親鸞の教学思想の解明を試み、その仏性思想に焦点をあてることによって、親鸞の教学が人間の尊厳の問題に深く関わる独自性と普遍性を持つものであることの一部が明らかになった。また、漢文・和文両典籍相互の連関を用語の研究を軸にして確かめることを得た。次に『歎異抄』や『口伝鈔』等親鸞滅後に成立した典籍によって、親鸞教学の継承と本願寺教団の基礎確立の意義を考究することに努め、特に『歎異抄』の和語に注意をはらいつつ、『顕浄土真実教行証文類』や聖閻の『唯信鈔』との密接な関わりを究明した。さらに、『蓮如上人御文』や『蓮如上人御一代記聞書』等、本願寺中興の祖とされる蓮如関係の典籍に主眼を置きつつ、高田派の典籍三点や、『唯信鈔』・『一念多念分別事』のように真宗の人の著作ではないが親鸞とその門下に多大な影響を与えたものをも視野に入れて、真宗教学の生成を支えた思想的背景と真宗教団の発展ないし民衆化の問題について解明を試みた。以上は、「大正大蔵経」第八十三卷所収の浄土宗および真宗関係の典籍における学術用語研究を企図したものである。

第三に、同八十四巻の前半に収録される浄土教典籍、融通念仏宗の融観の『融通門門章』、時宗第七世託何の『器朴論』、源信『往生要集』、永観『往生捨因』、著者不詳の『安養抄』、凝然『浄土法門源流章』等、同じ浄土教といっても多様な著作の二々について学術用語を研究した。特に注目されることの一つは、撰述当時盛んに行われたが今日現存しない資料が引用文として見出されたことである。『安養抄』には、法位の『無量寿経疏』、義寂の『無量寿経述義記』、智光の『無量寿経論釈』等の文が出され、当時の浄土教研究の動向を示すものとしても重要である。

第一・第二に於て我々は多くの和文典籍を対象とした。浄土宗各派の教義・真宗各派の教義は、その内容は差異があるが、往生浄土の実践面に関して一様に思索が深められている点や「弥陀をたのむ」「他力」等の用語が民衆教化の中心になっている点に一応の共通点が見られることが知られた。今後なお学術用語の精査によって浄土教典籍相互の内的連関性を究明していくことが必要であり、本研究がその一助となり得ることをひそかに念ずるものである。

昭和六十一年度は浄土教関係典籍の索引の印刷に入り、その校正作業を進める。それとともに、昭和六十二年以降に予定している「日本撰述俱舍論関係典籍における学術用語の研究」の準備作業を開始している所である。

## 〈一般研究〉

# 昭和60年度「一般研究」研究概要

## 〈共同研究〉

### 『教行信証』章節の共通表示化への研究

研究代表者 幡谷 明  
本学 教授 (真宗学)

当研究班は『教行信証』が真に内外へ公開されることを願って、最終目標として共通表示化を掲げたが、そのための前段階的な基礎研究として、主として、(一)、科文研究、(二)、坂東本を底本とする『教行信証』のテキスト作成、(三)、『教行信証』関係資料の蒐集を中心に行うことを目的として、昭和五十九年度から昭和六十年度の二年間、研究を行った。

(註、当研究の目的ならびに意義については、『研究所報』No.11、また昭和五十九年度の研究概要は『研究所報』No.13に記載済みなので、ここでは、昭和六十年年度の研究概要についてのみ報告する。)

この基礎研究を行うために、構成員を、共通表示研究(構成論研究)班(=A班)、原典研究班(=B班)、資料蒐集班(=C班)の三班に分け、研究を進めてきた。

A班は

- (一)、科文の歴史研究
- (二)、『教行信証』公開の歴史的研究
- (三)、英訳『教行信証』の研究

について主に研究を行った。(一)の科文研究は、章節研究を行う上での基礎となるものであり、大谷派・本願寺派・高田派の『教行信証』研究の中で、科文に論点を絞って研究を行った。特に、大谷派については香月院講師までを中心に科文表を作成し、綿密に検討を進めてきた。(二)については、『教行信証』の公開という観点から、特に金子大栄師の『教行信証』に対する関わりについて論究してきた。(三)においては、現在までに出版されている数種の英訳『教行信証』の研究を進めてきた。

B班は、坂東本の中で、『大集経』や『弁正論』などが引文されていて、最も問題点の多い「化身十卷(末)」について、

- (一)、『定本親鸞聖人全集』第一巻・『教行信証』三本(=坂東本・西本願寺・高田本)の比較校異の検討
- (二)、『教行信証』版本五本(=寛永本・正保本・明暦本・寛文九年本・寛文十三年本)の比較校異の検討
- (三)、『教行信証』所引の経論釈の典拠の研究

の三項目にわたって研究を行った。(三)については、坂東本と『大藏経』などの現存の經典類との比較校異を進めた。特に、『弁正論』に関しては坂東本と『広弘明集』所収の『弁正論』との比較校異も行い、典拠について考察した。

C班は、研究所の意向もあり、『教行信証』関係の講録や論文などの資料蒐集を行い、そのカード化を図り、目録作成を検討中である。

その内容は

- (一)『教行信証』関係雑誌論文の蒐集とカード化
  - (二)『教行信証』関係の講録類の蒐集とカード化
- である。(一)については、与えられた期間と予算の関係上、明治時代から昭和五十六年までに限定し、また、(二)についても江戸末年までに限定し作業を進めた。この蒐集の中には、『教行信証』講録の中で初期に属する高田派の普門の『教行信証師発覆鈔』二百五十巻も含まれる。これは高田派専修寺の御好意により複写の許可を得ることができ、大谷大学・龍谷大学両図書館に収められた。この講録は今まで、「正信掲」の部分だけは出版されているが、底本は写本によっており、普門直筆は未公開であったものである。今後、検討を要する資料となろう。

次に、昭和六十年年度中に当研究班で開催した研究会の内容について略記しておきたい。A・B・C班全体の研究会を五回、公開講演会を一回開催し、各研究班相互の認識を深めた。この中の公開講演会は、重見一行氏をお招きし、「現存資料による教行信証成立過程の考証」と題して講演をお願いしたものである。

講演の内容は

- (一)、坂東本の成立過程と高山・西本願寺両本の関係

- a、成立過程の大要
  - b、西本願寺本の位置
  - c、高田本の位置
  - ③、化巻における改訂と書改
    - a、巻末大集経切り入れの時期と問題点
    - b、後序の問題
- についてであった。

最後に、今後の課題について略記しておきたい。まず、A班の科文研究は香月院講師までに留めたので、今後、それ以降についての研究が残されている。また、本願寺

派・高田派についても残された講録を検討し、総合的に考察する必要がある。次に、B班においては、『教行信証』の比較校異並びに典拠の研究が、「教・行巻」と「化身土巻(末)」に留まっているので、残された巻の作業を進め、全巻のテキスト化に向けて研究を行う必要がある。さらに、C班においても、昭和五十七年以降の関係論文、並びに明治時代以降の文献の蒐集とカード化を継続して進める必要がある。

なお、二年間の研究の成果の詳細は、次期発行の『研究所紀要』に発表する予定である。

### 〈共同研究〉

## 真宗寺院史料の研究

研究代表者 北西 弘  
本学 教授  
(日本仏教史学)

二年間の作業を経て、本研究の最大目的であった既蒐集史料の目録作成がほぼ完了した。これらの史料(写真および調査カード)は、今後博綜館第3研究室分室1に移管され、ひろく活用される事になろう。そこでこの場を借りて蒐集史料の原本所蔵者一覧を提示し、今後の利用に供したい。

史料はこれら各所蔵者別に整理されており、同研究室に備える所蔵者別50音カードを検索する事で、プリント・ネガないしはカラスライドおよび所蔵者別目録の所在がわかる。さらに所蔵者別目録は文書・記録・典籍・美術工芸品等に類別した一覧表になっており、個別に写真番号を付しているのので、個々の史料を見るにあたってはこれを検索されたい。

#### 蒐集史料原本所蔵者一覧 (50音順)

安乗寺(大谷派)：滋賀県蒲生郡日野町中ノ郷  
安養寺(大谷派)：岐阜県郡上郡八幡町柳町  
雲乗寺(単立)：福井県大野市南六呂師  
永観堂禅林寺(西山禅林寺派)：京都市左京区永観堂町  
栄照寺(大谷派)：滋賀県高島郡マキノ町下開田  
永徳寺(高田派)：岐阜県安八郡神戸町横井  
円覚寺(本願寺派)：岐阜県羽島市竹鼻町狐穴  
円光寺(本願寺派)：岐阜県古城郡古川町殿町  
円徳寺(本願寺派)：岐阜県岐阜市神田町  
応行寺(本願寺派)：福井県大野市明倫町

応瑞寺(大谷派)：滋賀県蒲生郡日野町杉  
尾崎家：奈良県橿原市今井町  
恩善寺(大谷派)：岐阜県郡上郡大和村徳永  
願慶寺(大谷派)：滋賀県高島郡マキノ町海津  
願行寺(本願寺派)：奈良県吉野郡下市町下市  
歓喜寺(本願寺派)：岐阜県高山市三福寺町  
願証寺(大谷派)：滋賀県蒲生郡日野町村井  
願正坊(大谷派)：岐阜県岐阜市大門町  
願随寺(本願寺派)：愛知県碧南市鷺塚町  
願泉寺(本願寺派)：大阪府貝塚市中  
教願寺(大谷派)：福井県大野市要町  
敬応寺(本願寺派)：大阪府枚方市招提町  
敬念寺(大谷派)：岐阜県岐阜市西庄  
弘誓寺(大谷派)：滋賀県愛知郡湖東町中一色  
弘誓寺(大谷派)：滋賀県神崎郡五箇荘町金堂  
弘誓寺(本願寺派)：滋賀県八日市市瓜生津町  
顕性寺(大谷派)：岐阜県大垣市林町  
賢勝寺(大谷派)：福井県勝山市荒土町別所  
玄照寺(大谷派)：滋賀県八日市市御園町  
賢竜寺(大谷派)：福井県大野市小矢戸町  
光延寺(大谷派)：滋賀県蒲生郡日野町西大路  
興敬寺(大谷派)：滋賀県蒲生郡日野町西大路  
光教寺(大谷派)：福岡県浮羽郡吉井町上新町  
光照寺(本願寺派)：滋賀県八日市市上羽田町  
興正寺富田林別院(興正派)：大阪府富田林市富田林町  
光闍坊：石川県加賀市西山田  
光沢寺(大谷派)：岐阜県羽島郡柳津町本郷  
西栄寺(大谷派)：滋賀県高島郡マキノ町西浜  
西円寺(大谷派)：岐阜県大垣市草道島  
西順寺(本願寺派)：岐阜県本巣郡北方町北方  
最勝寺(大谷派)：福井県大野市明倫町  
最勝寺(本願寺派)：福井県大野市稲郷

- 西入坊 (大谷派) : 岐阜県各務原市下中屋町  
 西遊寺 (本願寺派) : 滋賀県彦根市賀田山町  
 鷺森別院 (本願寺派) : 和歌山県和歌山市鷺の森  
 滋専寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町小荒路  
 下間仲都家 : (不詳)  
 下間頼広家 : 京都府京都市上京区出水通小川西入  
 浄安寺 (大谷派) : 岐阜県岐阜市中大桑町  
 浄願寺 (大谷派) : 福岡県瀧郡城島町六町原  
 勝久寺 (本願寺派) : 岐阜県高山市大新町  
 常敬寺 (大谷派) : 新潟県上越市寺町  
 上宮寺 (大谷派) : 岐阜県岐阜市大門町  
 上宮寺 (大谷派) : 岐阜県岐阜市長森町前一色  
 性顕寺 (本願寺派) : 岐阜県安八郡神戸町末守  
 勝光寺 (本願寺派) : 石川県加賀市打越町  
 照光寺 (大谷派) : 滋賀県蒲生郡日野町内池  
 浄光寺 (木辺派) : 滋賀県八日市市上平木町  
 常興寺 (本願寺派) : 福井県大野市伏石  
 浄照坊 (本願寺派) : 大阪市天王寺区真田山町  
 浄念寺 (大谷派) : 滋賀県八日市市野口町  
 正通寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町白谷  
 勝鬘寺 (大谷派) : 愛知県岡崎市針先町  
 浄満寺 (単立) : 福岡県浮羽郡吉井町上新町  
 称名寺 (高田派) : 福井県足羽郡美山町折立  
 照蓮寺 (大谷派) : 岐阜県高山市堀端町  
 信願寺 (大谷派) : 岐阜県安八郡神戸町末守  
 真宗寺 (本願寺派) : 岐阜県吉城郡古川町三之町  
 瑞泉寺 (本願寺派) : 新潟県上越市高田  
 晴明寺 (大谷派) : 滋賀県蒲生郡日野町村井  
 善敬寺 (大谷派) : 滋賀県彦根市八坂町  
 善行寺 (大谷派) : 岐阜県岐阜市笹土居町  
 専勝寺 (大谷派) : 福岡県八女郡黒木町今  
 専精寺 (本願寺派) : 岐阜県不破郡垂井町泉  
 善照寺 (本願寺派) : 滋賀県彦根市薩摩町  
 専長寺 (本願寺派) : 岐阜県岐阜市黒野町  
 善能寺 (本願寺派) : 和歌山県和歌山市道場町  
 専明寺 (大谷派) : 滋賀県蒲生郡日野町鎌掛  
 善養寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町蛭口  
 善立寺 (大谷派) : 滋賀県守山市金森町  
 速入寺 (大谷派) : 岐阜県高山市石蒲町  
 尊宝寺 (本願寺派) : 兵庫県多紀郡篠山町立町  
 高山別院 (大谷派) : 岐阜県高山市鉄砲町  
 地福寺 (天台宗) : 滋賀県八日市市布施町  
 長久寺 (本願寺派) : 岐阜県安八郡神戸町川西  
 長光寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町寺久保  
 長順寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町寺久保  
 超勝寺 (大谷派) : 福井県福井市藤島町  
 長徳寺 (大谷派) : 岐阜県郡上郡大和村万場  
 長福寺 (大谷派) : 福岡県三井郡北野町今山  
 伝正寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町野口  
 洞雲寺 (曹洞宗) : 福井県大野市清滝  
 等覚寺 (大谷派) : 岐阜県安八郡墨俣町寺町  
 東漸寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町寺久保  
 南専寺 (本願寺派) : 福井県大野市下唯野  
 伯東寺 (大谷派) : 福岡県浮羽郡田主丸町菅原  
 福生寺 (仏光寺派) : 滋賀県八日市市上平木町  
 福善寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町海津  
 仏照寺 (本願寺派) : 岐阜県揖斐郡大野町公郷  
 法蔵寺 (本願寺派) : 滋賀県彦根市南河瀬町  
 法養寺 (大谷派) : 滋賀県蒲生郡日野町三十坪  
 法蓮寺 (大谷派) : 福井県大野市要町  
 法勝寺 (本願寺派) : 岐阜県岐阜市城田幸町  
 法勝寺 (本願寺派) : 福井県勝山市沢町  
 本覚坊 (大谷派) : 新潟県上越市下野田  
 本行寺 (本願寺派) : 滋賀県神崎郡能登川町種  
 本啓寺 (大谷派) : 滋賀県八日市市蛇溝町  
 本向寺 (本願寺派) : 福井県足羽郡美山町市波  
 本光寺 (本願寺派) : 岐阜県吉城郡古川町二之町  
 本照寺 (大谷派) : 滋賀県伊香郡西浅井町大浦  
 本誓寺 (大谷派) : 滋賀県蒲生郡日野町日出  
 本通寺 (大谷派) : 滋賀県蒲生郡日野町八丁野  
 本伝寺 (大谷派) : 福井県大野市本町  
 本福寺 (本願寺派) : 滋賀県大津市本堅山町  
 三浦講  
 明意寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町牧野  
 明覚寺 (大谷派) : 岐阜県養老郡石津町上  
 名願寺 (大谷派) : 滋賀県高島郡マキノ町小荒路  
 明願寺 (大谷派) : 福岡県小郡市横隈  
 明源寺 (大谷派) : 福井県大野市明倫町  
 妙光寺 (本願寺派) : 福井県小浜市神田  
 明善寺 (単立) : 福岡県三井郡北野町今山  
 村松家 : 新潟県東頸城郡浦川原村長走  
 唯願寺 (大谷派) : 岐阜県養老郡上石津町下山  
 陽願寺 (大谷派) : 福井県福井市南居町  
 養教寺 (大谷派) : 岐阜県岐阜市東島  
 竜仙寺 (本願寺派) : 福井県勝山市元町  
 了西寺 (本願寺派) : 福井県勝山市本町  
 蓮敬寺 (本願寺派) : 滋賀県伊香郡西浅井町大浦  
 蓮照寺 (大谷派) : 福井県勝山市北郷町東野  
 蓮成寺 (本願寺派) : 愛知県碧南市鷺塚町  
 蓮明寺 (大谷派) : 福岡県久留米市宮ノ陣町若松

〈共同研究〉

「オックスフォード運動」の  
意義とその影響について

研究代表者 多田 稔  
本学 教授 (英文学)

本研究は19世紀英国思想界における最大の運動であったジョン・ヘンリー・ニューマンをリーダーとする「オックスフォード運動」の根本理念及びその経過を解明し、意義を明確にすると共に、且つその影響が英文学に及ぼした跡を辿ることであった。この運動は、英国の最盛時ヴィクトリア朝に入る直前の英国国教会の内部における、いわば体制内改革というべき運動であった。そして、この運動の過程において多くの中心人物たちが離脱したり、あるいは英国国教がそこから分離した根源であるローマ・カトリシズムに回帰したりしたため、この運動は挫折してしまった。このことの示唆する意味は大きい。また、その各界に及ぼした影響は測り知れないものがある。つまり、この運動が当初なぜ発生したのかといえば、「当代の自由主義に抵抗すること」であり、世を挙げて俗化、無秩序の方向に奔る人心を堰き止めるためのものであったのだ。この計画は当初は、この運動をローマ化することなしに英国国教会の内にあるプロテスタント的なものを排除することにあった。そうして当時ヨーロッパを捲席した自由主義、合理主義の影響を除き、宗教改革以前の精神、しかもローマ抜き英国カトリック教会設立にむかって彼らは進んだのである。しかしながら、この運動が挫折すると、これが契機となっははずみがついた様に、両極化の過程が進行していった。伝統的ローマ・カトリックへの復帰とその反対の合理主義あるいは自由主義の流れである。自由主義はさらに唯物論的世界観の方向、自然科学万能の傾向へと拍車をかけた。

このような基調をそれぞれに反映させてそれ以降の19世紀のイギリス文学は極めて多彩である。この運動の最右翼で、後にローマ・カトリックに改宗したニューマンを培ったのが浪漫派のスコット、コウルリッジ、サウジー、ワーズワースであった一事をとってみても、この運動がさまざまな要素を含んだものであったことがわかる。

この一年間において、計画書に記されたように、各担当者は、それぞれの分野における基本図書の購入あるいは整備に全力をつくしていった。先づ中心となる「オックスフォード運動」については、折しも再版が出た『時局論小冊子集』をはじめとしてキリスト教に関する基本図書を充実させた。キープル、ラスキン、モリス、アーノルド父子、ホプキンス、ペーターなど十九世紀の文人たちをはじめ、今世紀のT・S・エリオット、イヴリン・ウォー、グレアム・グリーン等までそれぞれの系譜に従って著書を揃えてきた。60年度分の予算は殆んど全額をこうした著書購入にあてたのである。幸いにも、この研究はひきつづき61年度も継続させていけることになった。従って今年度は、60年度購入の図書において欠けた点を先づ充実した上で、これまで通り、各人の研究結果を互いに連絡し合いながら、来年予定している論文作製にむかって努めたいと思っている。

目下の大まかな分担は次の通りである。

ウィリアム・ワーズワース、ジョン・キープルの文学の研究、ウィリアム・モリス、ウォルター・ペイター、ウィリアム・B・イェーツへの文学の流れの調査研究(内藤)、カトリシズムの流れ、G・M・ホプキンス、エヴリン・ウォー、グレアム・グリーンなどの研究(鈴木)、批評の流れと小説、トマス・アーノルド、マッシュュー・アーノルドを中心とした批評の流れ、及び19世紀の英国の宗教の具現者としてのジョージ・エリオットの小説研究(村瀬)、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスの流れ20世紀のハーバート・リードへ通じる芸術教育論の系譜の研究(佐々木)、オックスフォード運動の根本理念とその意義、ならびに19世紀英国文芸思潮のさまざまな局面との関連性の跡づけを(多田)が行なう。

〈個人研究〉

『注維摩経』の研究

研究員 木村 宣彰  
本学専任講師 (仏教学)

呉の支謙や後秦の鳩摩羅什らによって伝訳された『維摩経』という經典は、中国の仏教学上に大きな地位を占めている。豊かな文学的構成と内容を有するこの經典は、中国仏教の最初期において当時の玄学的な時代思潮に投合し、仏教の受容定着に大きな役割を果たした。次いで南北朝時代に至り仏教教義の専門的な研究が興るとともに、三乗差別の立場にある『般若経』や『維摩経』と一乗平等を説く『法華経』や『涅槃経』とを如何に調和し会通するかという重要な課題が新たに生じた。そこで、天台・三論・法相などの中国仏教を代表する各宗の祖師

はいずれも『維摩經』を研究し、その注釈を為しているのである。

当該研究の課題である『注維摩經』十卷は、『維摩經』の漢訳者である鳩摩羅什とその門下の僧肇・竺道生らの『維摩經』に対する注釈を合せて編纂したものである。従って、『維摩經』の漢訳者自身の見解を窺うことができる『注維摩經』は、『維摩經』の研究において宗派的立場をこえた最も権威のある絶好の指導書となるのである。しかも、鳩摩羅什・僧肇・竺道生らは中国仏教の初期において偉大な業績を為し、後の仏教に至大の影響を与えた英傑である。それ故、この『注維摩經』はただ単に一經典たる『維摩經』の研究のみに関わるものではなく、当時の仏教思想を知る上でも極めて重要な資料である。

このように『注維摩經』は仏教思想史上における貴重な典籍でありながら未だその内容及び形式の全体にわたる総合的研究はもとより、本書の成立・編纂・構成・流布などの基本的事項に関わる検討すら必ずしも十分に為されているとはいえない。そこで標記課題のもとに本研究が計画されたのである。期間中の研究状況のあらましは次の如くである。

(一) まず、本研究の基礎的準備として本件に関する近代の研究状況を子細に調査し整理した。研究論文はもとより本学図書館に未収の『維摩經』の注釈書などの蒐集を行った。また、『昭和法宝総目録』(全3冊、所収目録77種)や『仏教書籍目録』(大日本仏教全書全2冊、所収目録74種)をはじめとして各種目録を精査し、本書の研究及び流布の全容を知ること努めた。目録等の調査によって本書に八巻本と十巻本の両種が存在し流行していたことが判明した。高麗義天の『新編諸宗教蔵総録』などの諸録では、いずれも本書をもって十巻となしているが、興福寺の永超が編んだ『東域伝灯目録』には「維摩詰經注八卷 僧肇等註 録云羅什三藏等註 亦名浄名集解」と記録している。本書の八巻本を記載する諸目録は、この永超録を継承してほぼ類同の註記をなしている。諸目録の記載の調査を通して見るととき現行の大正大蔵經所収本の如き十巻本の外に八巻本が流布していたことが明らかになる。しかし、十巻本と八巻本との相違がただ単に調卷上のことなのか、あるいはまた内容・構成までも異なるのかについては、目録等の検討のみでは解明出来ない。

(二) そこで、是非とも実際に『注維摩經』の諸本等の資料を調査し蒐集につとめねばならない。本書の書写本としては、(1)大和多武峰談山神社所蔵(平安時代写)本 (2)京都醍醐寺所蔵(奈良時代写)本 (3)龍谷大学赤松連城文庫所蔵(敦煌出土、唐代写)本 (4)出口常順氏所蔵(トルファン出土、僧肇単註)本などが

現存する。これらはいずれも首尾一貫した完本ではないが、研究の資料としては極めて貴重なものである。このほかにスタインやベリオが蒐集した敦煌出土の写本断片が教種類存在する。このような研究資料の蒐集は主に夏期休暇を利用しておこなった。醍醐寺や龍谷大学などで写本を調査の上、それを書写し一部を写真におさめた。

(1)の資料は『維摩經集解』と題する平安時代の写本であるが、本研究期間中には残念ながら実見することは出来なかった。しかし、本書は幸にして大正大蔵經(注維摩經)の対校本に採用されているので校勘を記した脚註からおおよそその内容を窺うことができる。また、(3)の資料は、その本文とは別筆で題せんに「注維摩經」とあるが、後日詳しく解読した結果、現行本の『注維摩經』とは一致せず、恐らくは唐道液の『浄名經集解関中疏』の第一巻の一部分であろう。

その他、現存の『注維摩經』の刊本も可能なかぎり蒐集につとめた。かくして諸本の比較研究の結果、内容や構成などの上で顕著に相違する二本の『注維摩經』の存在することが確かめられた。その一本は大正大蔵經や続蔵經に収められている『注維摩詰經』十巻であり、他の一本は縮刷大蔵經所収の『維摩詰所説經註』十巻である。この両本の間では經文の分節の仕方やそれに配せられる鳩摩羅什や僧肇らの注も相違する。殊に縮刷大蔵經本では竺道生の注が殆ど削除されていることが顕著な特色である。なお、この系統に属するものとして清の光緒十三年に金陵刻經処で刻印された『維摩詰所説經註』八巻がある。

大正大蔵經の『注維摩詰經』は寛文十三年の刊本を底本と為していることによってもわかるように、従来から我が国に伝わっていた『注維摩經』の単行本によったものであり、また縮刷大蔵經所収本は、明版大蔵經の『維摩詰所説經註』をそのまま収めたものである。詳細にその内容を検討した結果、後者は前者の抄出本と考えられるのである。大正大蔵經本の『注維摩經』と縮刷大蔵經本の『維摩詰所説經註』とは共に巻数は十巻であるが、内容上では広略の関係にあり、それぞれ「広本」「略本」と称すべきものである。しかも、その広本にも八巻本と十巻本とがあり、略本にもまた八巻本と十巻本とが存在することが明らかになった。

従来、学界の一部においては、内容上の十分なる詮索を抜きにして、実は単なる調卷の問題である八巻本と十巻本とをとりあげて、そのうちに八巻本を以て古形であると判断し、その上で『注維摩經』の成立や編纂について論じている。かかる学界の論調に対して再検討を加えることができた。

(三) 先のような原典に対する検討を経て『注維摩經』の解読につとめた。解読研究によって得た成果の一端は、

本研究期間中に既に「維摩詰経と毘摩羅詰経」(『仏教学セミナー』42,1986)と題して発表した。また、『注維摩経』中に引用する「別本」や本書成立の背景などに関する研究成果は、本年六月に東京大学で開催される印度学

仏教学会の学術大会に於いて発表する。このような個別の課題の検討を経た上で本研究の成果の全体を論文にまとめる予定である。

## ＜個人研究＞

### 真下飛泉研究

研究員 佐々木正昭  
 本学助教授 (教育学)

「研究所報」No. 13の研究目的で述べておいたが、既に京都市立修道尋常小学校時代の真下、同尚徳尋常小学校時代の真下、晩年の真下については概ね調べ得たので、本研究では京都府師範学校附属小学校時代並びに京都市立有済尋常小学校時代の真下について調査研究及び資料収集することを目的とした。真下は京都府師範学校附属小学校の訓導であった明治三八年五月二八日の地久節を祝う学芸会で「出征」を演劇、コーラス形式で歌わせた。時まさに日露戦争の日本海海戦の火蓋が切って落された翌日のことであった。「国難」とされ、祖国の命運をかけて超大国ロシアとの闘いのさ中、逼迫する難局の緊張が頂点に達し、人々は戦場にある肉親に思いを寄せている時のことであったので、「出征」は人々に大きな感動を与え感涙にむせぶ中で大喝采を浴び、たちまち大評判となって人口に膾炙したのである。この成功によって真下は翌年七月までに「出征」以下一二篇の長大な叙情的叙事詩を書くのであり、中でも第三篇の「戦友」(ここはお国を何百里……)は爆発の人気を呼び、真下は一躍国民的歌手となるのである。しかしながらこの連作の表紙に「学校及家庭用言文一致叙事唱歌」と記されていることから分るように、これらの歌は、当時の唱歌、軍歌の歌詞及び内容が子どもにとって難解であることを憂えて作られたものであることに注意を向けておく必要がある。本来子どもを対象としたこの連作(特に「出征」「戦友」)が、単に子どもに留まらず、「工男工女、車夫馬丁の徒に至るまで道々之を朗誦して彼の卑俗なる鼻歌に代らんとす」と真下によって回想される程にまで、流布したのであったが、このことの意義は大きく、この言文一致の歌が全国的に人口に膾炙されたことによって、文語詩か口語詩かという従来と全く論議のあった問題が

決着され、言文一致の口語詩が市民権を獲得したのである。この点における真下の役割は改めて評価されねばならぬであろう。さらに真下は「出征」の演出にもみられるように、とかく教科書の朗読や課題主義によって書かれた児童の綴方の発表に終っていた学芸会にコーラスや演劇を採用して大胆な変革を行ない、又課題主義の風潮の強かった中で自由な綴方によって生活を綴らせることを主張、実践しているのである。しかし自由な形式での生活を綴る綴方方式は当時あっては時期尚早で受け入れられず、これに対しては激しい批難があったのである。さらに真下は韻文教授方法についての著作、文部省教科書に採択された「家」を初めとする多数の作詞、童話の著作、「京都お伽俱樂部」等社会教育への参画、京都府教育会の機関誌編集等々、実に多面的精力的な活動を行っているのである。これらのいわば時代を先取りした独創的、多面的活動は、京都府師範学校在学中からの二人乗り自転車や回旋式水揚機等の多種多様な発明工夫(中には特許を取ったものもある)、「万朝報」に投稿した作品が入選し、これが師範学校に知れあやうく放校されかけたような言動、京都市立有済尋常小学校時代に「浪速青年文学会」「よしあし草」に投稿、文学活動に参加、さらに与謝野鉄幹が新詩社を起こすや、下宿先を新詩社京都支部として同好の志を募り、盛んに文学論議や文学活動を行なうと共に「明星」に盛んに投稿して相当数の短歌が採択されたこと等、にみられる真下の独創的、意欲的な性格、文学・芸術的志向の強い性格が下敷になっているのである。本研究は、京都府師範学校附属小学校時代並びに京都市立有済小学校時代の真下の足跡を追うために各種資料を収集し、関係者を訪問すると同時に真下が活躍した当時の時代背景、即ち当時の政治、社会、文化、教育の動向の究明に意を注いだ。しかし何分にも五、六〇年も前のことであって、関係者の多くはすでに鬼籍に入り、資料も収集しにくく、いくら調べても如何ともし難い部分が残る。ともあれ、未だ充分とはいえないので、この時期の真下についての研究は、今しばらくの時間が必要であり、今後継続して研究調査していく予定である。

さらに、本研究に関連して今一つ報告しておきたいのは、京都府師範学校時代の真下の教え子にして、後には真下の強力な片腕となった久我ヨネのことである。久我

は特に文学的方面に優れた才能を示した。すでにその萌芽は附属小学校の時代からあったに違いない、久我をよく知る人によれば、久我は小学校から女子師範学校を卒業するまで、常に首席を通したという。真下は自己と趣味、傾向を同じくする久我のこのような才能を愛しみ、その誠実な人柄を信頼したものと思われる。というのも、

真下は校長として赴任した修道尋常小学校、尚徳尋常小学校に常に久我を招聘しているからである。久我也よくこの期待に答え真下を蔭日なたく支えたものと思われる。この度久我が書き残したものを筆者がまとめて一冊の本として近々上梓する運びとなった。これも真下飛泉研究の成果として併せて報告しておく。

### 〈個人研究〉

## 保育者養成機関における 宗教教育の現状と課題

研究員 松村 尚子  
本学助教授 (社会学)

本年度の研究課題は、前年度にひき続き、一つには幼児教育並びに保育者養成における宗教教育の実際に関する文献の蒐集とその解題を試みること、二つには、本学幼児教育科卒業生の現状についての実態調査のまとめを行うことであった。このうち、後者に関しては、既に集計をほぼ完了しており、近くその結果の概要を報告できる運びである。

第一の課題については、主として、昨年復刻刊行をみた J. K. U. (Japan Kindergarten Union 日本幼稚園連盟) のアニュアル・レポート (英文、全七巻) の吟味検討を通して、日本の幼児教育の黎明期における保育と保育者養成の理念と実践的活動のありようを追究することに焦点が置かれた。

わが国の公的な幼児教育・保育の歴史において、キリスト教主義の保育が、そのいわば草創の時代から一貫してリードしその発展に大きな役割を果たしたことは周知されることである。なかでも、フレーベル主義の幼児教育論は最初期から広くとり入れられ、多大の影響をもち続けてきた。明治九 (一八七六) 年創立のわが国最初の幼稚園とされる東京女子師範学校附属幼稚園では、フレーベルの「恩物」による保育が中核であったというし、同十三年 (以下便宜上、西暦年は略す) の桜井ちかによる桜井女学校附属幼稚園 (東京)、同十九年ミス・ポートルらにより設立された英和幼稚園 (金沢)、同二年ミス・ハウ設立の頌栄幼稚園 (神戸) 等初期の幼稚園においては、フレーベルの教育思想にもとづく保育が有力であった。また、わが国初の保育者養成機関として明治十一年に設立 (翌十二年開校) された東京女子師範

学校保姆練習科は、応募者難のために第一回入学生十一名を得たのみでまもなく廃止されるといったように、幼児教育に対する一般の関心がきわめて低かった当時において、質量ともに備えた保育者養成の機関を創設し支え続けたのは、主にキリスト教諸宗派の婦人宣教師を中心とする人々であった。たとえば、最初の私立の保育者養成所である桜井女学校幼稚保育科 (明治十七年設立、同二九年廃止) や頌栄保姆伝習所 (同二二年) をはじめ、広島女学校保姆師範科 (同二八年)、柳城保姆養成所 (同三一年)、東京保姆伝習所 (同三五年)、活水女学校保姆師範科 (同三八年)、梅花保姆伝習所 (同三九年) 等々、いずれも婦人宣教師の手に成るものであった。そこでは、保姆の資格についても未だ明確な規定のなかった時期からすでに、修業年限二、三年の、広範囲にわたるかなり高水準の教育が施され、それらを巣立った卒業生が各地方において子どもとその親たちに影響力を及ぼしていったのである。そのうちでも、わが国の幼児教育界にとりわけ重要な足跡を残したのは、前記頌栄保姆伝習所及びその保育実践の場である頌栄幼稚園を創設し、さらにはやがて J. K. U. 設立の提唱者として初代会長の任に就いたハウ女史である。

アニー・L・ハウ (一八五二～一九四二) は組合教会派所属の教育宣教師で、専門学校音楽科卒業の後シカゴのフレーベル協会保姆伝習学校に学び、続く十年近くを故国にて保育にたずさわった後に、明治二〇年関係者の招きに応じて来日、以降昭和二年に引退帰国するまでの四〇年間にわたって、理論と実践力を兼ね備えた保育の専門指導者として活躍した。フレーベリアンとしてのハウは、その二大著作である『人の教育』『母の遊戯及育児歌』を翻訳出版するとともに、フレーベルの精神、そのオーソドックスな教育哲学・幼児教育論をわが国に紹介導入し、真に教育の立場に立った幼稚園教育を求め実践した人物として知られる。

明治三九年、そのハウの提唱により「宗派をこえてすべての幼な子を神の子として育てる」ことを使命とする人々によって組織された J. K. U. は、I. K. U. (万国幼稚園進盟、現在の A. C. E. A. 国際幼児教育連盟の前身) と連繋を保ちながら、その成立の経緯からして当然なが

らフレーベリズムの影をひきつつ様々な活動を行って、わが国の幼児教育に多大の貢献をなしたのである。そこでは、人間を身体的・精神的・道徳的・霊的な「統一体」としてとらえ、教育は人間の本質である「神性」を發揮させる仕事であるとして、子どもの生活と自由な遊びのもつ意味の深い理解に立脚することにより、子どもの力を十全にひき出すことのできる保育者の育成が目標とされた。そしてそのためにも、「新しいおり紙や縫いとりの本、積み木やゲームの本ではなく、心理学、哲学、教育学、科学、文学、芸術といった分野の本」が求められ、「恩物や手技工作の技術的使用法（これも無論必要であるが）以上に基本的理念を」（明治四一年の J. K. U. 協会会長挨拶）「広い一般的な教養」をもつ保育者である

ことの必要性が主張されたのであった。

フレーベルの幼児教育思想自体が現在においてもつ意義と限界については、先に土戸敏彦論文において詳しく論じられたところである（土戸敏彦「フレーベルのロマン主義——幼児教育におけるその有効性について——」当研究所『研究所紀要』第3号、一九八五年所収）。が、幼児期からして、学歴主義、技術主義、「効率」主義的な思潮、生育環境に否応なくまきこまれている現在の子どもたちを思うとき、その保育の任に当る保育者の養成において、かつてのフレーベル主義に代表される J. K. U. の所期の理念と事業を掘り起し、その実績を再確認することは、いまなお現実的な意義をもちうるものといえるであろう。

研究所行事

昭和61年2月20日以降の行事は次のとおりであった。

真宗学事研究 研究会

2月20日（木）

「教権の下で——高倉学寮・宗学の成立——」  
研究員 草野顕之氏

「近代との邂逅——護法場・大学への萌芽——」  
研究員 木場明志氏

「仏教の解法に向かって——大谷大学の新生——」  
研究員 鈴木幹雄氏

3月12日（水）

「『親鸞の仏教史観』（曾我量深）をめぐって」  
嘱託研究員 福島和人氏

「異安心史について」 嘱託研究員 西田真因氏

海外仏教研究 研究会・学術懇談会

3月4日（火）

“Shinjin: More than 'Faith'?”  
John Ross Carter 博士  
(Colgate University 教授)

4月16日（水）

“Buddhist Studies in USSR” (スライド使用)  
G. M. Bongard-Levin 博士  
(Institute of Oriental Studies  
Academy of Sciences USSR)

※ ※ ※

『研究所紀要』第3号（昭和59年度研究報告）が発刊された。内容は次のとおりである。

「ヴァルプルギスの夜」の背景——魔王の場について  
..... 岸 繁一  
近代文学と仏教——宮沢賢治・芥川龍之介——  
..... 渡辺貞磨  
外村文学と浄土思想..... 喜多川恒男  
萩原朔太郎の仏教的情想..... 仲野良一  
ツォンカパの解明する清弁の中観思想——『了義未了  
義論』二(二)(X)(a)試解——..... 片野道雄  
フレーベルのロマン主義——幼児教育におけるその有  
効性について——..... 土戸敏彦  
天台智観の医学思想序説..... 山野俊郎  
福井県大野市・勝山市・足羽郡美山町 真宗寺院史料  
目録..... 大桑 斉

昭和59年度 研究所報告  
執筆者紹介

Chih-i's Interpretation of the Four Noble Truths in the  
*Fa hua hstian i*..... Paul L. Swanson  
Annotated Translation of the *Ssu-chiao-i (On the Four  
Teachings), chüan 1*..... Robert F. Rhodes  
A Review of Some Approaches to Hermeneutics and  
Historicity in the Study of Buddhism  
..... John C. Maraldo

研究所報 第15号

1986年6月30日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603 京都市北区小山上総町